

1. 鹿児島県の概要

(1) 地勢

本県は九州の南端に位置し、九州本土に属する薩摩・大隅の二大半島及び種子島、屋久島、奄美群島をはじめとする多くの離島からなり、東西約272km、南北約590kmにわたる広大な県土を有しています。

その総面積は全国第10位で約9,187km²、離島が県土面積の約28%と大きな比重を占め、43市町村からなり人口は約159万人(令和2年国勢調査時)です。

本土は火山噴出物である火山灰、火山砂、火山礫、軽石層、いわゆるシラス層の丘陵台地が広がり、平野に乏しい地形となっています。

中央部を南北に霧島火山帯が縦断し、霧島山、桜島、開聞岳等の11の活火山が分布し、豊富な温泉資源にも恵まれています。

本土から西南にのびる島々は、喜界島、沖永良部島、与論島の低平な島を除いては、海面からそびえ立つ山体で構成され平地に乏しい地形となっています。特に屋久島は、面積わずか504km²ですが、1,936mの宮之浦岳をはじめ、永田岳、黒味岳など九州のいずれの山岳も及ばない標高を有しています。

(2) 気候

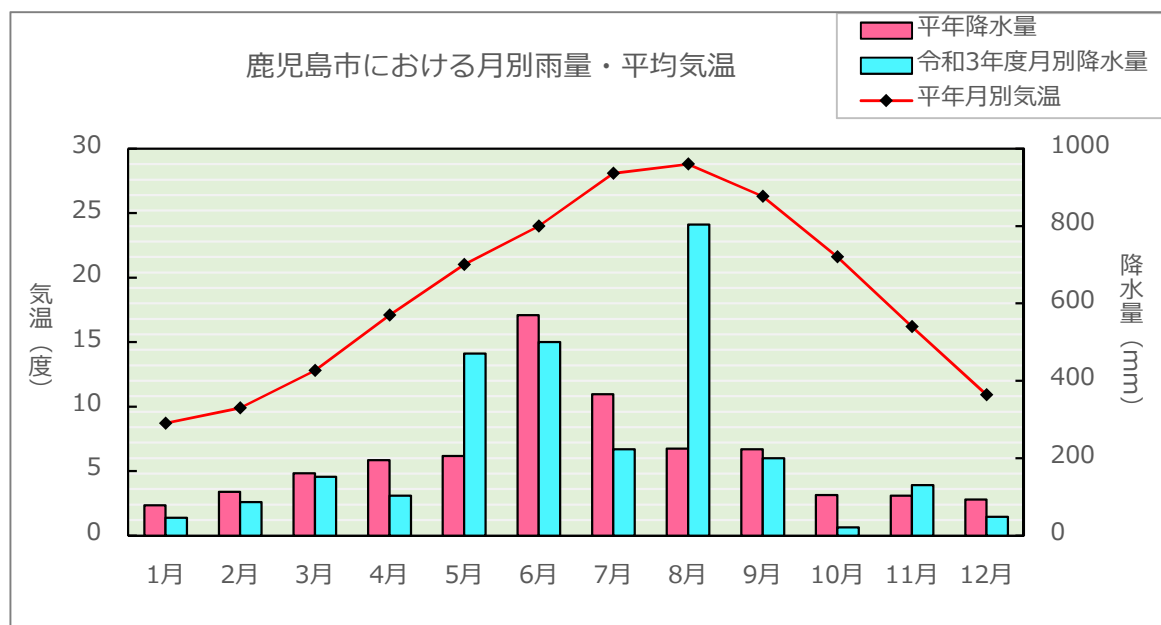
本県は、温帯から亜熱帯まで広範囲の気候帯に属します。

本土の年間平均気温は15～19度で、年間平均降水量は約2,500mmと、温暖多雨の気候です。

種子島、屋久島地方から奄美地方にかけての気候は、年間平均気温が19～22度で、年間平均降水量は2,800mm以上と亜熱帯気候に属します。

また、これらの降雨の大半は、梅雨期から台風期にかけて集中しています。

2021年(令和3年)7月豪雨では、8日から10日にかけて薩摩・大隅地方を中心に断続的に雨が降りました。9日夜遅くから10日昼にかけて局所的に猛烈な雨や激しい雨となり、10日の朝、鹿児島地方気象台は出水市、伊佐市、薩摩川内市、さつま町に大雨特別警報(浸水害・土砂災害)を発表して最大級の警戒を呼びかけました。この大雨で、八重山(薩摩川内市)で110.5ミリ、紫尾山(さつま町)で96.5ミリの1時間降水量を観測し、ともに観測史上1位の値を更新しました。また、さつま柏原と紫尾山(さつま町)では、8日～10日の3日間で553ミリの降水量を観測し、7月の月降水量(平年値)に匹敵する値を記録しました。



(3) 地質・土壌

本県にはシラス、ボラ、コラ、赤ホヤなど、火山噴出物由来の特殊な土壌が広く分布しています。代表的なシラスだけで県本土の51%(3,430km²)を占めるなど、県土の大半を覆っています。

また、大規模な火山噴火活動によって形成された始良カルデラ、阿多カルデラ、鬼界カルデラといったカルデラ地形を複数有しています。

特に、始良カルデラは9万年～2万5千年前の間に形成されたもので、この時代の噴火で発生した火砕流の堆積物がシラス台地を形成しています。

シラスなど火山噴出物由来の土壌は水を含むと崩れやすく、今まで幾度となくがけ崩れや土石流等の大規模な土砂災害をもたらしてきました。

また、紫尾山、高隈山地、肝属山地や薩摩半島南部域、甕島、屋久島及び奄美群島には花崗岩類がみられ、これらの一部で風化が進みマサ土化しています。

